

国際多元文化専攻シラバス

2016年度前期

多元文化論講座

先端文化論講座

アメリカ言語文化講座

東アジア言語文化講座

ヨーロッパ言語文化講座

ジェンダー論講座

【多元文化論講座・前期】

◆科目名：現代文化思想分析論演習 a

◇副題：ミシェル・フーコーの思想 2016-1

◇担当教員：飯野和夫

◇開講時限：前期木曜 2 限

◇教室：文系総合館 522

◇目的・ねらい：

人々が現在までに切り開いてきた文化の重要な一部をなす西洋の文化、特に思想を分析して理解を深め、私たちのこれからの文化や思想のあり方について考える。

多元的な文化の一部をなす西洋の文化・思想についての講義であるから、多元文化論の応用力を養成する授業である。ただし、西洋の文化・思想については、基礎的理解力から応用力までの養成を目指すものである。具体的には、まず西洋の思想についての基礎知識を与え、併せて、特に西洋の現代思想について理解する応用力の養成も目指す。

◇履修条件等：

授業で対象とする思想は主としてフランス系だが、授業は日本語で進め、テキストを読む場合も日本語訳、英訳を併用する。したがって、フランス語を既習であることは必須とはしないが、現代の思想、あるいはヨーロッパの思想に興味を持っていることを受講の条件とする。この授業に続けて後期開講の「現代文化思想分析論演習 b」を受講することが望ましい。

◇講義内容（演習）：

現代フランスの代表的思想家であるミシェル・フーコー（1926-1984）の思想を通じて西洋思想について考える。

担当者（飯野）の専門は、18 世紀から 20 世紀までのフランスを中心とした西洋思想（哲学、社会思想など）である。担当者は、18 世紀の革新的思想であった「感覚論」（コンディヤックらの、人間の知性は感覚から発達するとした思想）を研究し、同時に、18 世紀について論じている現代の思想家（デリダ、フーコーら）も研究している。この授業では、近年は、受講者の興味も勘案して、現代フランスの代表的思想家であるミシェル・フーコーの思想を取り上げている。2016 年度前期の演習 a では、社会史を扱うフーコーの初期、中期の著作を扱う。具体的には、『狂気の歴史』（1961）、『監視と処罰』（1975）、『性の歴史 第一巻 知への意思』（1976）を扱う。

資料、講読用テキストともプリントを用意する。授業では、受講者が事前に

資料等の予習をすすめていることを前提として、まず上に挙げた著作について飯野が内容の紹介・解説、参考文献の紹介などを行う。次いで各著作の重要部分をより詳しく検討する。授業中には質疑応答の時間を設けるので、受講者は積極的に授業に参加すること。

この授業に続けて後期開講の「現代文化思想分析論演習 b」を受講することが望ましい。受講者には、各自が大学院で受講しているさまざまな授業を通して学んでいることと関係させつつ、本授業で学んだことを論じるレポートの提出を求める。

◇教科書・参考書等：

授業内容を参照のこと。

◇授業期間中の課題：

資料、講読用テキストともプリントを事前に配布するので、受講者は事前に資料等を予習してくること。

◇成績評価の方法：

1)フーコーのテキストの内容、授業の内容についての理解度、2)授業の内容を発展させる授業中の議論への貢献度、3)レポートの内容、を考慮して総合評価する。おおむね 1) 33%, 2) 33%, 3) 33%の割合で評価するが、授業への出席が一定の割合に満たない場合は、評価以前に失格とする。

◇注意事項：

続けて後期開講の「現代文化思想分析論演習 b」を受講することが望ましい。

◇授業についての問い合わせ：

木曜日 3 限をオフィスアワーとする。

◇連絡先：

ino@nagoya-u.jp

文総館 5 階 507 号室

◆科目名：異文化接触論演習 a

◇副題：異世界表象の考察—西欧近代の地球的規模での展開の諸相を批判的に検討する— (1)

◇開講形態：演習

◇担当者：田所光男

◇開講時間：金曜 3 限

◇教室：文総 624

講義目的：諸文化の比較研究における基礎的理解力を確保し、修士論文・博士論文を執筆するために応用力を高める。また、この分野で研究を遂行し、成果

発表をするための実践力を養成する。今期の授業の中心は、エドワード・サイードの著作を読解し、その強みと弱みを検討することに置かれる。

◇授業内容：

1) 論文批評

〈いい論文〉、〈よくない論文〉、とはどういうものかをまず理解する。特に、論文作法における、a. 絶対にやってはいけないこと、b. 最低限やるべきこと、c. こうするとよくなること、などを、実際の例にあたって考察する。ここで取り上げる論文は、皆さんにとって当面の目標となる『多元文化』、『Autres』等に掲載されている論文である。

2) 異世界の表象の考察

①共通テキストとして予定しているのは、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』である。この著作を読解するには、近現代の西欧の文学・芸術ばかりではなく、当時の歴史を地球的規模で把握しておく必要がある。

②そこで、まず、受講者全員が共有すべき最低限の枠組みを田所が提示したい。具体的には、16世紀西欧における新大陸表象を、ミシェル・ド・モンテーニュを中心に検討しつつ、科学革命、産業革命、市民革命、植民地主義、民族解放戦争、ジェノサイド、普遍主義、文化相対主義、等の概念について共通理解を持てるようにしたい。

③上記①に記した共通テキストを、実際にどのように担当するかは、受講者の人数と関心によって、臨機応変に決めて行きたい。

◇教科書、参考文献等：

授業に参加するために必要な文献は、授業の中で指示する。

◇授業期間中の課題：

1) 論文批評担当回までに、論文を読み込み、レジュメを作成する。

2) 『オリエンタリズム』の担当部分についての発表担当回までに、文献調査と、その読み込みを行い、詳細なレジュメを作成する。

3) 担当しない回では、あらかじめ与えられる資料について、読み込みを行い、ディスカッションポイントを考える。

◇成績評価方法・基準：

・以下の3点から総合的に評価する。

1) 『多元文化』や『Autres』に掲載されている論文1本について口頭で批評を行なう（おおよそ20%）。

2) 『オリエンタリズム』の担当部分について、資料を準備し口頭で発表を行う（おおよそ50%）。

3) 授業で行われる発表後の質疑への参加（おおよそ30%）。

・二つの口頭発表を行わない場合は「欠席」とする。

◇履修条件・注意事項

履修条件は特にないが、文化の移動に関わる科目を履修していると理解しやすいであろう。

◇授業についての問い合わせ：

必要に応じていつでも、が原則ですが、できれば電話・メールなどであらかじめ連絡してください。

◇連絡先：

tadokoro@cc.nagoya-u.ac.jp

内線 5311

文系総合館 7階 707号室

◆科目名：文化記号論 a

◇副題：記号論入門

◇開講形態：講義及び演習

◇担当教員：古田香織

◇開講時限：火曜 3限

◇教室：文総 522

◇授業の目的と目標（ねらい）：

記号論について、講義と文献読解（授業中に指示）により、その基本的理論、概念、方法論について学び、それらを実際の分析へ応用することによって、文化現象を多角的に捉えることのできる視野を養うことを目的とします。すなわち、まず記号論（および文化記号論）に対する基礎的理解力を養成し、次に、記号論が言語・文化の具体的な事象にどのように応用されているのかについて色々な分析例に触れ、様々な理論を個々の研究へ発展させることのできる応用力を養っていきます。みなさんのそれぞれの研究テーマが記号論とは直接関係がないとしても、この授業を通して、柔軟な思考力・応用力・分析力を身につけてもらうことがこの授業の目標です。

◇履修条件等：

1) 受講にあたり、池上嘉彦著 『記号論への招待』（岩波新書）を読んでおくこと

が望ましい。

2) 後期開講の「文化記号論 b」を併せて受講することが望ましい。

◇講義内容：

この授業では特定のテキストを用いず、基本的な用語や考え方についての、様々な研究者の理論を引用しまとめたプリントを使用します。

授業は以下のように進めます。

- 1) まず、初回の授業では、この授業についてのオリエンテーションを行います。授業の進め方、評価の仕方、プリントの配布、参考文献等の紹介を行います。また、『記号論』のプロローグとして、“記号”についての講義を行います。
- 2) 第2回目は講義形式で、『記号論』の代表的な研究について通時的に（時間の流れにそって）概観します。また、第2回目でほしいこの授業を受講するメンバーが決まるので、ここで、後半の演習（発表）での担当者とコメンテーターを割り振り、順序を決めます。
- 3) 第3回目は講義形式で、『記号論への招待』で取り上げられている記号論の基本的な用語や考え方を基盤とし、最近の記号論を取り巻く傾向も加味しながら、その基本的概念、方法論について説明します。
- 4) 第4回目以降は、『記号論』という学問をさらに理解するために、記号論的な考え方やアプローチを用いた、あるいは応用していると思われる論文を発表形式で読んでいきます。毎回、受講者はあらかじめ指定された記号論に関する論文を読み、その内容を簡単にまとめておくことが課題となります。授業での発表は、あらかじめ割り振られた担当者がハンドアウトを用いて行い、担当者に前もって指名されたコメンテーターがさらに補足をし、以下他の受講生がそれぞれコメントを述べ、残りの時間は自由に質問をしたり、問題点を指摘したりしながらディスカッションを行い、さらに記号論についての見識を深めつつ、その応用の可能性を学びます。
- 5) 最終回には、それぞれの発表をもう一度振り返りながら、論点や問題点について再度ディスカッションを行いながら、エピローグとしてあらためて-ここではみなさんに-“記号”について考えてもらいます。最後に、各々が発表した論文について、授業でのディスカッションをふまえてまとめたものをレポートとして提出してもらいます。

◇成績評価の方法：

評価は、課題（発表・レポート）および出席点（出欠、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度）に基づいて行います。

- 1) 発表：論文の理解度、読解の正確さ、ハンドアウトや説明がわかりやすく構成されていたか→40%（100点満点で40点）
- 2) 出席点：やむを得ない場合を除き授業に出席し、論文をきちんと予習して、積極的に発言をし、ディスカッションにも参加したか→30%（100点満点で30点）
- 3) レポート：論文をきちんと理解し、ディスカッションで得られたポイント

トも整理できており、わかりやすく書けていたか→30% (100 点満点で 30 点)

4) 以上を基準として評価し、60% (100 点満点で 60 点) 以上を合格とします。

◇テキスト：

初回以降、適宜プリントを配付します。

◇参考書等：

- ・池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書 (必読文献)
- ・ウィリアムスン著、山崎／三神訳『広告の記号論 I、II』柘植書房
- ・石田英敬『記号の知／メディアの知』東京大学出版会

その他、必要に応じて授業中に指示します。

◇注意事項：

受講を検討しており、初回の授業に参加できない場合は、前もって個別に相談に来てください。

◇連絡先

j45914a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

文系総合館 5 階 506 号室

◇オフィスアワー：水曜日 3 限 ※前もってメールでアポイントを取ってください。

◆科目名：中南米言語表現論演習 a

◇副題：スペイン語・ポルトガル言語文化圏対照研究 a

◇開講時限・教室：前期月曜 4 限 (受講者と相談の上、変更あり)・北 305 号室

◇目的・ねらい：

(中南米言語表現論演習 a では、スペイン語圏を中心に扱う予定であるが受講者の諸条件を考慮し柔軟に内容を検討する。)

スペイン語とポルトガル語、両言語を広い視野から総合的に対照し知識と理解を深めるための演習である。すなわち本演習において、これら 2 言語自体に対し様々な領域や場において接触する可能性のある受講者が、研究を進めるための方法論に言語学的基礎付けする機会を見出すことを目的としている。なぜならば、東海・中部圏はこれら 2 言語に対する社会的需要が高く、問題に対処するためには、単なる会話能力のみならず、高度な言語学的素養も求められているからである。

本演習では、2 言語への習熟が単位認定の基本的要件となる。しかしながら、

近親言語であっても両言語を等しく、いわゆるバイリンガルに扱うのは実際には極めて困難であるので、まずイベリア半島起源の言語に関わる知見を広げてみようといった好奇心を第一に課題に取り組んで欲しい。

◇履修条件等：

少なくともスペイン語またはポルトガル語いずれかの基礎的運用力。

いずれか一方を主専攻言語、他を副専攻言語と本演習では呼称する。スペイン語またはポルトガル語話者の留学生諸君の受講も歓迎する。留学生諸君は単なるインフォーマントとしての演習への参加のみならず、日本語および近親言語との比較対照により、母語について新たな発見とより深い認識が得られるであろう。

◇講義内容：

〔概要〕

演習であることから、様々な目的や条件を持った受講者に対応するため、開講時点では特に定めない。また、シラバス編集上、スペイン語圏とポルトガル圏とに分けて記載するが、両言語圏を並行して扱うことも可能である。

〔授業方法および計画〕（スペイン語圏関係を中心に）

以下に、過去数年間の主要な内容を示すので参考にしてほしい。

第一週の授業は、授業内容と進め方を受講生と相談した後、残りの時間、以下のテキストを扱い2言語について一般的な差異について概観する。

Liturgia de las Horas（時祷書）のポルトガル語・ラテン語版との言語的比較対照。

以下に、過去数年間の主要な内容を示すので参考にしてほしい。

2015 年度：演習 b を参照。

2014 年度：演習 b を参照。

2013 年度：社会学系分野のスペイン語圏留学生を対象に、NHK制作の英語番組を中心に、日本およびアジア地域の文化経済に関して、スペイン語によるプレゼンテーションとディスカッションを行った。

2012 年度：スペイン語圏からの留学生が1名受講していたことから、各自スペイン語でパワーポイントを使用した研究テーマを一週一名の輪番形式で準備し、プレゼンテーションとディスカッションを行なった。

2011 年度：ブラジル人留学生が2名受講していたことから、各自ポルトガル語またはスペイン語でパワーポイントを使用した各自の研究テーマについてプレゼンテーションを行い、その後ディスカッションを行なった。

2010 年度：「解放の神学」の先駆的实践者の一人、アルゼンチン人神父カルロス・ムヒカの伝記（スペイン語）の始めの部分を講読。第二次世界大戦前後からペロン復権までのカトリック教会と社会に関する考察を行った。

2009 年度：演習 a は、スペイン語とポルトガル語と二つのグループに分けて実施した。

スペイン語圏専攻者のためのグループは、各週ほぼ 1 作の割合で、スペイン語圏各国を代表する劇映画を視聴し、各地域の言語文化的特性を分析した。

ポルトガル語のグループは、ポルトガル語を専攻語学とする受講者とブラジル人留学生を対象に、日本語とポルトガル語の双方向のコミュニケーションを目標に、日本の新聞に現われたブラジル人コミュニティに関する記事の講読、ブラジルで制作された映画のポルトガル語字幕の活字おこしを通じた聴解練習とコミュニケーション分析などを行った。

2008 年度：文献の精読：ペルー農村部の教育問題、北部メキシコの農村の社会的変動

2007 年度：文献の精読：ペルーの国民文化形成、メキシコ社会の変容等。留学生を交えた討論等。 2006 年度：南米移民についての資料研究、発表、スペイン語文献の精読。留学生を交えた討論等。

2005 年度：スペイン語史・語学に関するスペイン語文献の講読と発表、討論。

複数年度にわたり適宜対象としてきた演習内容：日本国内制作のスペイン語・ポルトガル語メディア。日本国内のスペイン語話者、ポルトガル語話者の言語社会的状況。

◇成績評価の方法：

スペイン語とポルトガル語 2 言語への習熟を前提に、次の 3 要素を中心に総合的に判断する。

- 1) 各自のテーマについての発表（学会・研究会等の発表も含む）。40%
- 2) 講読文献（スペイン語・ポルトガル語両言語）の精読による発表。40%
- 3) 副専攻言語（スペイン語またはポルトガル語）による作文演習（ネイティブチェックを受けることが望ましい）。20%

◇教科書、参考書等：

最近使用した主要なものを掲載する。（スペイン語関係）

Martín de Biase, *Entre los fuegos Vida y asesinato del Padre Mugica*, Buenos Aires, 2009.

Jose Maria Arguedas, *Formación de una cultura nacional indoamericana*, México, 1998.

Milton M. Azevedo, *Introducción a la lingüística española* 2 ed., Pearson Education (New Jersey), 2005.

María Asunción Merino Hernando, *Historia de los inmigrantes peruanos en España*, Madrid, 2002.

E. Garduño; E. García; P. Morán, *Mixtecos en Baja California el caso de San Quintín*,

Ciudad de México, 1989.

Eliana Ramírez Arce de Sánchez Moreno, *Estudio sobre la educación para la población rural en Perú* (Proyecto-FOA-UNESCO), s. f..

試聴した劇映画：「ラベリント・デ・パン」「ベンガ」「エビータの真実」「100人の子どもたちが列車を待っている」「地下の民」「大きな翼を持った老人」「ローマの奇跡」「予告された殺人の記録」「わが心のマリア」「鳥の歌」

◇オフィスアワー：

月 5（授業終了後）。事前に連絡があれば他の時間帯も可。

◇注意事項：

スペイン語とポルトガル語を扱うことを大前提としている演習である。演習 a と b を履修することが望ましい。演習 b からの履修も可。

◇連絡先：

K46240a@cc.nagoya-u.ac.jp

全学教育棟（北棟）3F305号室